

東京農工大学のサザンカ



朝日鶴

Camellia sasanqua

東京農工大学農学部

「東京農工大学のサザンカ」の発行に寄せて

農学部長 笹尾 彰

本学農学部のF SセンターF M府中（旧附属農場）及び2，6号館周辺には、箱田直紀元教授の精力的な努力により、サザンカ・ツバキの品種が国内外から蒐集・保存管理されています。これらは、第一群「サザンカ品種群（NO.1～181）」、第二群「カンツバキ品種群（NO.182～260）」、第三群「ハルサザンカ品種群（NO.261～318）」、第四群「タゴトノツキ品種群（NO.319～320）」に分類され、国際的にも貴重なサザンカ・ツバキの品種群です。また、サザンカの栽培管理に関する情報及び保存されている品種の供給の希望も多く、サザンカ・ツバキをメインにしたフラワーパーク等（群馬 フLOWERパーク、浜松市フラワーパーク、宮崎市等々）は、本学に由来するものがほとんどであり、国内外のサザンカ品種の「保存と栽培管理に関する情報」、「栽培品種の提供」を行う、サザンカのネットワーク・センター的な役割を果たしています。

このようなまとまった形の学術的にも貴重な園芸品種のコレクションは、大学院教育、学部教育において、教育的に活用されているのみならず、栽培植物の品種改良、遺伝学的研究など、本学の研究にも重要な役割を果たしており、さらには、今後のバイオテクノロジーへの応用における重要な遺伝的資源としても本学の重要な資産となっています。また、その文化的な意味が深く存在することから、歴史学、文化論などとの学際的な研究、教育にも大きな役割を果たすことが期待されています。

また、平成13年11月から平成14年1月にかけて、国立大学共同利用機関である国立歴史民俗博物館（千葉県、佐倉市）において、本学のサザンカコレクションを主体としたサザンカ展「冬の華 サザンカ」が開催され、これらのサザンカ・ツバキ品種群が貴重な植物資源として広く認められました。

一方、このサザンカコレクションは、府中市の中でも重要な資産として位置づけられており、特に開花期においては、多くの市民が見学に訪れ、本学の地域社会への貢献としての重要な役割を果たしております。従来からサザンカなどの園芸品種は、特に中高年者を中心に、趣味の世界で根強い人気がありますが、昨今では、さらにガーデニングが大きなブームになって、園芸学の生涯学習の意義が高まっています。そのため、このようなまとまった形の学術的にも貴重な園芸品種のコレクションは、生涯学習的にも重要な意味を持っています。大学の地域社会への貢献、生涯学習への貢献が求められている時代にあって、本学はそのためにも重要な資産を保有していることとなります。

これらの資産を有効に生かすために、本学のサザンカコレクションの展示事業（現在所在している現場と、正門付近）および小冊子の作成を行うことにしました。

この小冊子により、学生のみならず地域住民の方々にもこのコレクションにより興味と親しみを持って頂こうとするもので、その内容は

- ① 東京農工大学サザンカの概要説明
- ② 野生種の分布説明
- ③ 開花写真、品種、育成地等の説明
- ④ 「日本の花サザンカ」の文化史説明

などを含んでおります。サザンカ・ツバキを知る一助になれば幸いです。

深まりゆく秋。冬じたくを終えた樹々に囲まれてひっそりと咲きつづける、サザンカ。寒風に追いたてられるように、はらはらと花びらを散り敷くサザンカは、四季の移りかわりの風情を伝えてくれる。

サザンカは、昔から庭園樹として利用されてきた日本生まれの花木で、関東以西の地域ではどこにいてもごくふつうに植えられている。しかし、一般に出まわっている苗は、昭和30年代以降に関西方面から販売されはじめたものが、その後生まれた新品種が多い。

サザンカが園芸植物として利用されるようになってからは、少なくとも350年が経過しており、その間、各地方で数多くの園芸品種が生まれ、そして一部は消え去っていった。現在、比較的多くの品種が残っているのは、関東、中部、近畿、九州などで、総数は、ほぼ300品種に達する。

日本の野生ツバキの仲間

サザンカは日本の山野に普通にみられるヤブツバキや飲料用に栽培されるチャなどとともにツバキ科ツバキ属に分類される。ツバキ属の原産地は日本を含むアジア東南部で、西はネパールから南はインドネシアまでの範囲に約250種が分布する。日本はこの分布圏の最東北端に位置し、自生する種の数はずかんに3種1亜種1変種にすぎないが、世界で観賞用に利用される園芸品種の大部分は日本を原産とするヤブツバキ、ユキツバキ、それからサザンカに由来する。そこで、はじめにサザンカの仲間である日本産の野生ツバキの特徴と分布の範囲を頭に入れておこう(図1)。

ヤブツバキ

青森県から沖縄までの各地に自生し、紅色6 - 7弁の一重の花を早春から開き、一般にヤマツバキの名で親しまれている。世界で栽培されている園芸品種の最も多くが日本の各地に野生するヤブツバキから生まれたものである。

リンゴツバキ

ヤブツバキの変種とされ、果実が大きく直径7 - 8 cmにも達し、赤褐色に色づくリンゴのように見える。屋久島産のものに命名されたため、ヤクシマツバキともよばれるが、屋久島以外にも九州の南部や西部地域で大形の果実をつける個体がしばしばみつかる。

ユキツバキ

一般にヤブツバキの亜種とされるが、独立種とされることもある。秋田県から京都府北部にかけての日本海側の山岳地帯に自生し、雪の下に埋もれて越冬する。雪解けとともに開花する花は鮮やかな紅色で花形が平開し、雄しべは梅のしべのように花中に広がるので、ヤブツバキとは容易に区別できる。

サザンカ

山口県の萩市を北限として、四国西南部と九州から沖縄にかけて自生する。自生種は6 - 7弁の白色で、10月から12月にかけて開花する。

ヒメサザンカ

奄美大島から西表島へかけて西南諸島の山地に自生する、花が小形の種。12月から2月にかけて開花し、花は白色で直径3 cm前後の極小輪であるが、甘い芳香をもつため香りツバキの育種親として世界で注目されている。

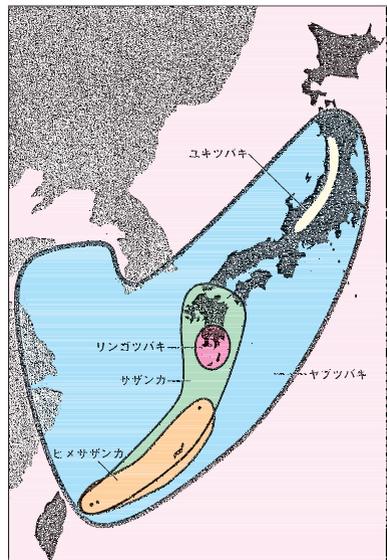


図1 日本の野生ツバキ分布

野性のサザンカ

サザンカの自生種は、沖縄県の西表島を南限とした南西諸島から、福岡県の北部を除いた九州のほぼ全域、四国西南部および山口県の萩市に分布する。自生北限地は、かつては佐賀県神埼郡東背振村の千石山（背振山系、北緯33度23分）とされ、1924年に国の天然記念物に指定されたが、その後、長崎県壱岐島（北緯33度50分）にも自生が見つかり、さらに最近では山口県萩市の指月山（北緯34度37分）が北限地とされている。

現在までの報告書と現地調査の結果をまとめると、自生分布範囲は図2のようになる。奄美大島から西表島へかけての自生種は、1918年に小泉により、別種のオキナワサザンカとされたが、現在は九州などの個体との間に別種として区別するほどの差が認められないとして、植物分類学上はサザンカに含められる。

サザンカ自生種の花は、10月から12月にかけて開花し、白色、5 - 7弁の重咲き（写真1）、花径6 - 7 cmで、花弁の先端がわずかに桃色を呈する個体はあるが、園芸品種にみられるような、花弁全体が桃色や紅色となる個体はほとんど見出せない。これに対して、花径、花弁数および花形などは同一地域内でもかなりの変異がみとめられる。

図2 サザンカ自生種の分布
図中の●は、現在までに自生が報告された地区、および自生を確認した地区を示す。



写真1 サザンカ白生種の花

サザンカの園芸品種

サザンカの自生種は白花であるにもかかわらず、一般に栽培されている園芸品種の花は、白から桃色、紅色、あるいは覆輪状の濃い紅色ぼかしが入るものなど多彩である。開花期は自生種より遅れて初冬から厳寒期に咲くものが多い。

今日では、形態、生態、生理、あるいは細胞遺伝学的な研究から、多彩な園芸品種が成立する過程において、自生のサザンカ以外にも紅花のヤブツバキやその園芸品種などの他種が関与したと考えられており、現存する300に及び品種は以下の4群に分類される。

サザンカ群

花色の点で、ヤブツバキの遺伝子が一部関与している可能性があるが、形態、生態的にはサザンカの自生種に近いグループで、10月から12月にかけて開花する。花は一重から二重程度で、雄ずいは原則として花弁に変化しない。花色は白、桃、紅および紅色の覆輪ぼかしがある。樹形は自生種に似て多くは立性。‘朝日鶴’、‘千代鶴’、‘花大臣’、‘快童丸’、‘大錦’、‘雪山’など多くの品種がこの群に属する。染色体数は $2n=90$ 、 120 、 150 などが知られている。



千代鶴

カンツバキ群

中部地方に古木が多い‘獅子頭’（関東では‘寒椿’とよぶ）の実生またはその後代と考えられるグループで、開花期は晩く11月から3月にかけて咲く。雄ずいの一部または多くが花弁に変化して八重咲きや獅子咲きの華やかな品種が多い。樹形は立ち上がり横張り性となる傾向が強く、枝葉が密生して仕立てやすいものが多い。花色は紅色や桃色が主体であるが、近年は白花の八重咲きや千重咲き新品種も多数出回っている。本群の品種はサザンカ群の品種と容易に交雑するので、中間的なものも多く、厳密には区別できないところもあるが、雄ずいが弁化することや開花期が冬で、しかも樹形が横張りとなるなど園芸上利用価値のある特徴が共通するため区別されている。‘獅子頭’、‘勘次郎’、‘乙女サザンカ’、‘昭和の栄’、‘富士の峰’、‘日の出富士’、‘朝倉’など広く普及している品種が多い。染色体数は $2n=90$ 。



獅子頭

ハルサザンカ群

サザンカとツバキ（主としてヤブツバキとその園芸品種）との種間雑種またはその後代と考えられているグループで、開花期はさらに晩く、12月から4月にかけて咲く。花形は一重咲きから八重や千重咲きまで様々で、花糸の基部が比較的長く合生し、花の子房や葉の主脈上に毛が少ないなど、ヤブツバキに近い特徴を示す。一部の例外を除いて、大部分の品種は結実率が低いかほとんど結実しない。花色は紅または桃色で白花品種は少数である。樹形は立性から横張り性までの変異がある。‘銀竜’、‘鎌倉紋’、‘飛竜’、‘大和錦’、‘三段花’、‘笑顔’、‘凱旋’、‘梅ヶ香’など約50品種が現存する。染色体数は $2n=45$ 、 60 、 75 でまれに $2n=90$ もある。



鎌倉紋

タゴトノツキ群

昭和初期からサザンカとして扱われてきたものに‘田毎の月’という品種がある。花は白色の小輪で、11月頃に咲き、葉は極端に大型で表面に油沢がほとんどない。現在ではこの品種は中国原産のユチャの系統と考えられている。ユチャは中国大陸に広く分布し、種子から食用油を搾るために栽培され、大正の頃にはその油や種子が輸入されていたことが知られているので、‘田毎の月’はその当時の生き残り系統と思われる。

‘田毎の月’はサザンカ群やカンツバキ群の品種と容易に交雑するため、両者の中間的な実生個体が多数存在するが、花弁が細く小輪となるため、ほとんど注目されることがなかった。



田毎の月

以上の各品種群の特徴をヤブツバキの特徴とともに一覧にしたものが表1である。

表1 サザンカ各品種群およびヤブツバキ品種の主要特性

品種群 特性	サザンカ	カンツバキ	ハルサザンカ	タゴトノツキ	ヤブツバキ
開花期	10～12月	11～3月	12～4月	11～12月	10～5月
花色	白～紅、ぼかし (白が基本)	白～紅、まれに ふち紅ぼかし	白～紅、縦絞り ふち紅ぼかし	白	白～紅、縦絞り (紅が基本)
花径	小～大輪	小～中輪	小～大輪	小輪	小～巨大輪
花卉の重ね	一重～半八重咲き (雄ずい弁化なし)	八重～獅子咲き (雄ずい一部弁化)	一重～千重咲き (花形は多様)	一重咲き (雄ずい弁化なし)	一重～千重咲き (花形は多様)
落花時における 花卉と雄ずい	ばらばらに散る (散り性)	ばらばらに散る (散り性)	多くは花卉と雄ずい が互について散る。 一部は散り性	花卉はばらばらに 散るが雄ずいは互 についてそのまま散る	花卉と雄ずいが互 についてそのまま落花する
花の香り	強	弱	ほとんどない ものから強い ものまで	弱	ほとんどない
子房および果皮の 表面の毛	多い	多い	多いものから 少ないものまで	多い	ない
開花時における 萼苞	開花時には落下	開花時には落下	多くは開花時 には落下。一部は着生	開花時には落下	開花後に落下
葉の大きさ	小～中	中	小～中	大	大～極大
葉脈	不明瞭	不明瞭	品種によって 比較的明瞭	明瞭	比較的明瞭
新梢および葉の 主脈上の毛	多い	多い	比較的少ない	多い	ない
樹形	多くは立性	多くは横張性	立性～横張性	立性で横にも張る	立性～横張性
染色体数 2n =	90、120、150など	90、120	45、60、75	105	30(まれに45)

現在のサザンカ品種

わが国で現在広く利用されている品種は、主として昭和30年代から兵庫県宝塚市や隣接の池田市を中心に販売されはじめたもので、'勳次郎'、'緋乙女'、'乙女サザンカ'、'昭和の栄'、'富士の峰'などのようにカンツバキ群のものが多く、その多くが八重咲きや千重咲き、獅子咲きで、花が枝一面に咲くと華やかであるため、その後、福岡県久留米市をはじめ各地で増殖された。しかし、これらはカンツバキの系統であるため、いずれも開花期が晚く開花の最盛期が冬になる。降霜期が早く訪れる地域では霜のために花が傷み、その能力を十分に発揮できない。どちらかというと、より暖地に適した品種である。

これに対して、江戸を中心に育成されたサザンカには、育成地の気候条件にあわせた早咲きの品種が多い。これらは昭和初期以降量産されることがなかったため入手が必ずしも容易ではなかった。しかし、近年は久留米市や新潟県下において増殖が行われ、生産業者のカタログにも比較的多くの品種が載せられるようになった。



勳次郎



緋乙女



乙女サザンカ



昭和の栄



富士の峰



皇王

海外のサザンカ

サザンカが欧米に渡ったのは1869年頃とされている。アメリカでは1930年代から50年代にかけて、沢田幸作氏らの手により品種改良がすすみ、現在では欧米やオーストラリア、ニュージーランドで作出されたものが約50品種に達している。その一部は近年我国に里帰りしているが、今までの品種にみられないような重弁の華やかな品種が多い。バラやボタンを思わせるような見るからに華やかなサザンカを好むかどうかは別として、これからの育種の一つの方向として注目に値する。



スパークリングバーガンディ

サザンカ群品種



東紅



稲妻



栄久綾



大空



御美衣



君の万歳



見鷺



三光錦



紫雲台



七福神



東雲



雪月花



雪山



昼夜錦



剣の舞



鳴海湯



初鏡



春雨錦



肥後入日の海



有希

カンツバキ群品種



朝倉



伊豆立寒



艶姿



重扇



吉良白寒椿



雲の峰



久留米緋の司



敷島



清水赤獅子



白雪姫



新乙女



夕陽



千載



稚子桜



日の出富士



不二の雪



美濃牡丹



武蔵野



ベティパトリシア



シャンソネット

ハルサザンカ群品種



旭



梅ヶ香



梅の風



笑顔



凱旋



唐衣



観音寺



京錦



銀竜



古金襴



小鼓



佐保姫



蜀紅錦



宝塚



伊達錦



天竜紅



星飛竜



倭姫



竜光



六歌仙

現存する古木について

園芸品種が記録に残る以前、あるいは少なくとも初期のものと考えられるサザンカの古木が各地で見える。しかし、サザンカはヤブツバキに比べると自生分布の範囲が限られ、油料植物として利用される場合でもツバキ油の一部を補う程度であったため、現存する古木もヤブツバキに比較すると少ない。推定樹齢200年以上の古木をまとめると表2の通りであり、その所在を地図上に打点したものが図3である。

表2 サザンカの古木一覧（近年に枯死した株も含む）

No	品種名	品種群	推定樹齢	花色	所在地	備考
1	凱旋	ハルサザンカ	400年	鮮紅色	長崎県平戸市、桑山家ほか	
2	なし	サザンカ	300年	白色	長崎県平戸市	野生型
3	なし	サザンカ	300年	白地紅ぼかし	熊本県熊本市花園町	
4	蜀紅錦	ハルサザンカ	200年	紅地白斑	福岡県久米市草野町吉木	
5	なし	サザンカ	200年	桃色	福岡県宗像郡宗像町	
6	なし	サザンカ	400年	白地紅ぼかし	大分県速水郡日出町、日出中学校	
6	なし	サザンカ	300年	桃色	愛媛県新居浜市角野北内、伊藤家	
7	なし	サザンカ	300年	白色	愛媛県大洲市北只、粟島神社	1974年頃枯死
8	なし	サザンカ	300年	桃色	香川県小豆郡土庄町、母倉家	
9	なし	サザンカ	450年	白色	山口県厚狭郡橘町、教善寺	野生型
10	なし	サザンカ	1,000年	白色	広島県庄原市、月貞寺	1972年頃枯死
11	なし	サザンカ	300年	白色	広島県豊田郡瀬戸田町、向山家	
12	なし	サザンカ	300年	白色	和歌山県伊都郡高野口町	
13	なし	サザンカ	400年	白色	京都府京都市左京区、詩仙堂	1996年に枯死
14	楊貴妃	ハルサザンカ	300年	鮮紅色	京都府京都市上京区、竜源院	1980年代に枯死
15	獅子頭	カンツバキ	200年	紅色	三重県三重郡菟野町、馬嶋家	
16	音羽	ハルサザンカ	200年	紅色	三重県三重郡菟野町、山下家	
17	なし	サザンカ	300年	桃色	福井県小浜市下根来、月昌寺	
18	鎌倉紋	ハルサザンカ	200年	紅地白斑	愛知県幡豆郡吉良町	
19	なし	ハルサザンカ	200年	紅色	愛知県幡豆郡幡豆町、円蔵院	
20	なし	ハルサザンカ	300年	桃色	静岡県浜松市、伊藤家	1975年頃枯死
21	竜光	ハルサザンカ	200年	紅色	静岡県浜松市竜光町	
22	なし	サザンカ	400年	白色	静岡県榛原郡榛原町、縄巻家	野生型
23	なし	サザンカ	300年	桃色	静岡県榛原郡相良町、養源寺	
24	なし	サザンカ	300年	白色	神奈川県藤沢市打戻	野生型
25	銀竜	ハルサザンカ	200年	白色外弁淡紅	千葉県佐倉市並木町、沢谷家	
26	なし	ハルサザンカ	600年	桃色	埼玉県深谷市原郷、斎藤家	
27	なし	ハルサザンカ	400年	桃色	埼玉県深谷市大谷、飯野家	
28	なし	サザンカ	200年	白色	埼玉県比企郡都磯川村、慈光寺	野生型
29	なし	サザンカ	200年	桃色	埼玉県比企郡都磯川村、霊山院	
30	なし	サザンカ	300年	桃色	群馬県佐波郡境町保泉	
31	なし	ハルサザンカ	300年	桃色	群馬県碓井郡松井田町中木	

推定樹齡は帝国森林会などの調査によるが、本州中部以南では自生地から離れた広い範囲に古木が点在する。これらの大部分はかつて庭園内に植栽されたものである。

大分県日出町の古木は、花卉の先端に桃色のほかしが強くあらわれ、自生種の中にはほとんどみられない花を開き、植えられているところが武家屋敷跡であることから、花色や花形に変わりものがあらわれた初期のものと考えられる。また、京都の詩仙堂の庭園に植えられていた大サザンカは、徳川家康の旧臣でこの地に隠居した石川丈山（1588 - 1672）の遺愛と伝えられ、白花であるが自生種にくらべると花弁数が多い（この詩仙堂の大サザンカは1996年の神戸淡路大震災の直後に倒伏枯死した）。

花弁全体が桃色で一重の花を開く古木は各地で見られる。その多くは花形が自生種とほとんど同じで、花色だけが変化したもので、現存する園芸品種とくらべて花がはるかに貧弱である。しかし、これらも園芸品種発達の初期においては珍重されたものと思われる。

表中の現存する古木31本のうち12本が、サザンカとツバキとの雑種あるいはその後代と考えられるハルサザンカである。長崎県平戸市の樹齡400年前後と推定される“凱旋”は幹周が約1.4mの古木である。周辺には自生種も分布するが、このハルサザンカは武家屋敷内の庭木として植栽されたものである。一般のサザンカにくらべると結実性は悪いが、時に結実し付近にはその実生と思われる個体が存在する。“凱旋”はツバキとサザンカの雑種第1代と考えられている。

“凱旋”は平戸市内に同一栄養系と思われるものが数株あり、また京都市大徳寺竜源院の通称“楊貴妃山茶花”（推定樹齡約300年であったが、1980年頃に枯死、現在は挿し木による2代目）、愛知県岡崎市の無名株（推定樹齡約150年）、高松市内の無名株（推定樹齡約100年）、山口県下の“紅玲”（推定樹齡約100年）、関東の“昭和の輝”（古木は不明）なども同一栄養系と思われる。

園芸品種が発達した初期において、サザンカとヤブツバキの交雑により生じたと考えられるこの‘凱旋型ハルサザンカ’が特別に珍重され、増殖されて各地で栽培されたらしい。このことは、貝原信篤（1694）が最初に記載した紅色サザンカの記録やSiebold et Zuccarini（1835）『Flora Japonica』のサザンカの図が‘凱旋型ハルサザンカ’の特徴に一致することも根拠となっている。

各地に広がった‘凱旋型ハルサザンカ’やその後代から、さらに二次的、三次的品種へと変異が拡大していったものと思われる。

カンツバキ群の基本品種“獅子頭”は三重県下に樹齡200年前後と推定される古木がある。しかし、本品種は1930年代にいたるまで関東へは伝わらず、また、とくに普及もみられなかったらしい。その後代から華やかな重弁花の品種が多数あらわれるのは主として1950年代以降である。明治時代初期に関西方面から普及した“富士の峰”一品種だけは、純白の重弁花で花着きがよく、また強健であったため東海地方から九州までの各地に樹齡100年前後の株が残っている。

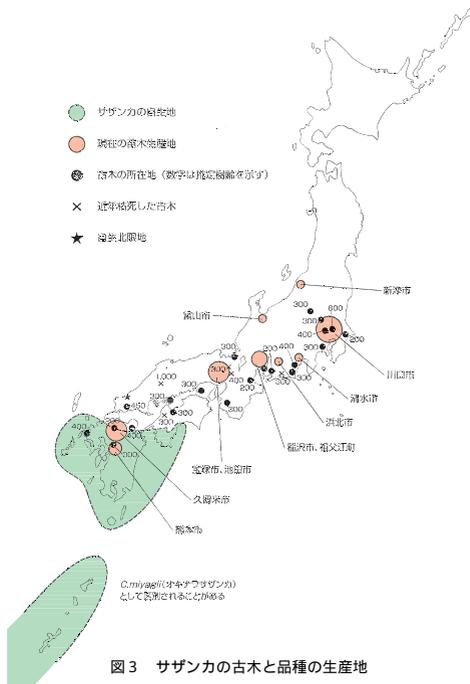


図3 サザンカの古木と品種の生産地

サザンカとツバキの見分けかた

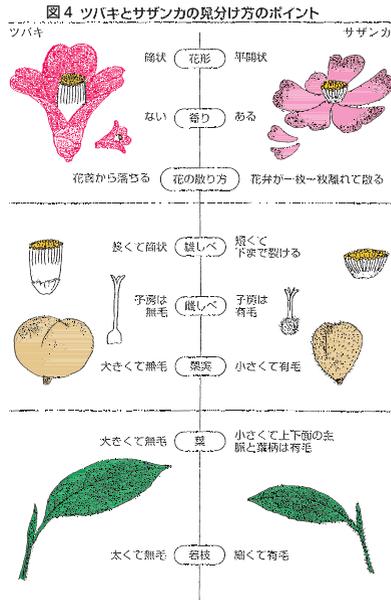
ツバキもサザンカも同じツバキ科ツバキ属なので、似ていて当然。両者はきょうだいかいとこ同士ぐらいの関係になる。

外観上の相違、ツバキは原則として紅花、春咲き、雄しべや花弁の下部が合生して筒となるが、サザンカは白花で秋から冬咲き、雄しべや花弁の下部は軽く合生するだけなのでばらばらに散る。

花を分解すれば、雄しべの基部の子房が毛で覆われているのがサザンカでツバキは無毛である。

葉はツバキが大きくほとんど無毛であるがサザンカの葉は小形で葉柄から主脈にかけて褐色の毛が密生する。

以上は基本的な違いで、変化の顕著な園芸品種では例外が多い。また、ハルサザンカのような中間型もある。



サザンカを育ててみよう!

品種の選び方

一般に市販されている品種は、いずれも強健で、栽培しやすいものなので、花色や花形、栽培条件（栽培地の気候など）に、適するかどうか、あるいは苗の良否などによって選定すればよい。

花色と花形の選定

野生種の花は、白色の一重咲きで、園芸品種には、白花のほかに、桃色、紅色、白地の花弁の先端部から紅色のぼかしが入るものがあり、色の濃淡もさまざま。紅色の地に白斑が入るものや、白地に縦絞りの品種は、あまり多くない。

花形は、6～7弁の一重咲きから、半八重、八重、さらに花弁数が多く、30弁以上になる千重咲きがある。とくに大小の花弁が入り混った獅子咲き品種は、華やかである。サザンカは、どの品種をとっても花つきがよいので、花色、花形、花の大きさの好みによって選べばよい。

栽培条件にあわせた選定

栽培地の気候に注意

関東地方や本州の日本海沿岸部などのように、霜や雪の多い地方では、厳寒期の花は十分にたのしみないので、降霜や降雪期が訪れる以前に開花する早咲き品種が最適。

しかし、後半に咲く花を寒さの犠牲にする覚悟であれば、晩咲きの品種でも、戸外で十分に栽培できる。また、鉢植えにして、軒下などでたのしむ方法もある。東海地方以西の暖地では、カンツバキやハルサザ

ンカの花が春先までみごとに咲き続ける。

良い苗の選び方

通信販売で求める場合には、確かめることができないが、園芸店やデパートの売場では、花を確認して購入することが安全である。

[小苗の場合]

小苗は、通常はポット植えされている。小さすぎるポットに植えられて、葉が黄色くなった苗は、植えかえをせずに放置したものであるから、元気を回復するまでに期日を要する。特に鉢植えとして仕立てる場合には、下方にも枝がある葉色の濃い苗を選ぶのがよい。

ツバキ、サザンカの葉は一般に3～4年間は枝に付いているので、写真右のような、下枝が枯れたり、葉の少ないものはさける。

[大苗の場合]

庭木や生垣用としてすぐに観賞できる大苗は、生産者が畑から掘りあげて、ワラなどで根巻きしてあるのが普通。

売場に長く置かれた苗は、古い葉が落ちているので今年伸びた枝だけでなく、前年の枝にも葉があるのは元気がよい証拠であるから、よく確かめて購入すること。



育て方

庭木としての植え込み 図5

苗は、通常、秋～冬にかけて入手できる。

大苗の場合は冬季でも移植可能で、花を確かめてから購入するとよい。厳寒期の移植の場合は、植えつけ後、株元にコモやワラを厚く敷き根を寒さと乾燥から保護する。

小苗の場合は、通常、ピニルポットに植えつけられたものが売られているが、サザンカの小苗は、比較的寒さに弱いので、2～3年生の苗はその後1～2年は鉢で育て1mくらいになってから庭に植えるのが安全。

庭への植えつけは、北風の当たらない暖かい場所を選べば観賞期間が長くなる。

植え込み方

苗木の根巻きより大きめの植え穴を掘る。

植え穴の底に堆肥と化成肥料1にぎりを入れた元肥を入れる。

元肥と根が直接ふれないよう間土を入れる。

ホースなどで水を加えながら、掘り上げた土を

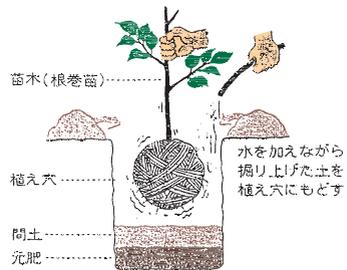
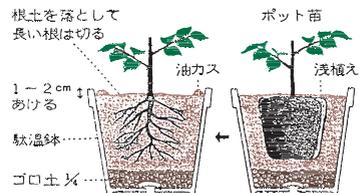


図5・サザンカの庭植え



3～4月に植えかえる 10～12月に植え込む

図6・サザンカの鉢植え

入れ、株をゆすりながら根のあいだに十分土が入るようにする。

植え込み終了後、寒さと乾燥を防ぐため株元に敷きワラをする。

鉢への植え込み

図6

10～12月ごろに植えつける場合には、購入した苗木のポットよりひとまわり大きい鉢に植えつける。この際、古い鉢土を落とさないようにする。また、3～4月ごろに植えかえる場合には、苗木の根の土を落としてから植えつける。この際、鉢におさまらない長い根は切りつめるとよい。

2年目以降の植えかえの場合は、古い土を1/3ほど落とし、長い根を切りつめてから植え込む。

植えかえ用土は、赤玉土または畑土に腐葉土かピートモスを3～4割ほど混ぜたもの。

生垣のつくり方

図7

生垣のなかで外垣と呼ばれるものは、敷地の外周につくって外部との境界にするもの。高さは1.5～2mくらい。敷地内での境界にするものは境栽垣と呼ばれ、高さは60～90cmくらいが理想とされる。サザンカは、外垣、境栽垣のどちらにも利用できるが、ここでは外垣のつくり方を図解した。植えつけ間隔は、小苗から早く生垣をつくりたいときには30cm前後とし、高さ1.5m以上の大苗から仕立てる場合には60cm間隔とする。

生垣の刈り込み

生垣づくりでは、刈り込みが重要な作業。

ふつう、花を觀賞しない種類では、年に2～3回刈り込みを行うが、サザンカの場合は同時に花も觀賞したいわけなので刈り込みの方法も多少違ってくる。

サザンカの花芽は春から伸びた新梢の先端近くに6～7月ごろ分化するので、夏以降に枝先を刈り込むとせっかくついた花芽をすべて落とすことになる。したがって、サザンカの生垣の刈り込みは、花の終わった冬～春先の3月ごろまでの間に、1回だけ行うのが理想的。夏以降に觀賞上好ましくないような長い枝が伸びてきた場合には、その枝だけ元から切り落とすとよい。

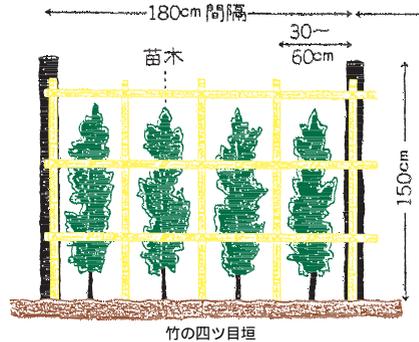


図7・サザンカの生垣

サザンカは、もともと日本の野生植物ですから、とくに心配するような病気はないが、害虫ではチャドクガの発生だけは注意が必要。チャドクガの幼虫は5月ごろと7～8月ごろの2回発生し、葉を喰いあらず。ひどいときには、葉を丸坊主にすることもあるので早めに駆除する。チャドクガは、ツバキや茶などにもつき、幼虫、成虫ともに毒をもっており触れるとかぶれるが、発生初期には多数の幼虫が一枚の葉の裏に群がっているため、虫に触れないように葉を切り落とし駆除する。殺虫剤にはきわめて弱く、ほとんどの薬剤で簡単に駆除できるので、市販のスプレー式殺虫剤を利用するとよい。

サザンカ案内図

東京農工大学農学部



- | | |
|-----------|--------------|
| A1 北道の北1 | D ボイラー室西～南～東 |
| A2 北道の北2 | E FSセンター本館周囲 |
| A3 北道の北3 | F FSセンター前通路東 |
| B1 北道の南1 | G 2号館東 |
| B2 北道の南2 | H 6号館北 |
| C1 中央農道南1 | |
| C2 中央農道南2 | |

東京農工大学のサザンカ

発行日 2003年3月31日

監修 東京農工大学農学部 元教授 箱田 直紀

発行 東京農工大学農学部

編集 東京農工大学農学部博物館設置準備委員会

印刷 電算印刷株式会社